北星学園大学大学院社会福祉学研究科 北星学園大学大学院論集第３号（通巻第15号）（2012年）・抜粋

自尊感情と自己愛がマウス・パラダイムによる自己評価に与える影響について

吉　田　未　来

自尊感情と自己愛がマウス・パラダイムによる自己評価に与える影響について

Influence Mouse Paradigm（MP）of self-esteem and narcissism upon self-evaluation

吉　田　未　来

問題

自尊感情とは、自身で自己への尊重や価値を評価する程度のことを示しており（Rosenberg, 1965）、自尊感情を単なる高低ではなく、安定性（Kernis, Grannemann, & Barclay, 1992）と言う観点でとらえた研究もある。

森尾・山口（2007）は、マウス・パラダイム（以下、MP）における軌跡データ（中心からの距離を元にした平均速度）で示される自己概念の力動性が、高い自尊感情が高い自己愛（小塩（1998）が作成した自己愛人格目録の下位尺度「優越感・有能感」、「注目・賞賛欲求」）へ結びつく調節効果を持っていることを見出している。そして、高い自尊感情が自己愛傾向と結びつくのは、自己概念の力動性が高い場合、つまり、自己評価が内在的に不安定である場合であることを示している。このMPは、自己評価を変化の無い静止したものとして考えるのではなく、自己組織化するダイナミカル・システムとして捉える自己へのダイナミカル・システム・アプローチ（Vallacher, Nowak, Froehlich, & Kaufman, Rockloff, 2002； Nowak&Vallacher, 1998）に依拠している。また、MP測定の意義について、森尾（2005）は意識の時間的変化を行動的に捉えられる点、そして、評価の時系列的な測定が出来る点などを挙げている。つまり、行動的および時系列的に測定することで、これまでの質問紙による研究だけでは捉えることの難しかった変動（安定）性を扱える可能性が高い。

しかし、森尾・山口（2007）で使用されたような自己愛人格目録では、自己愛の誇大性や攻撃性を特徴とし、他者の反応への無関心さを特徴とする自己顕示型の自己愛のみが測定されていると考えられる。近年では、他者評価への敏感さや、内気さ、対人恐怖的心性を特徴とする自己愛である「薄皮型」、「内密型」、「過敏型」と言った自己愛のタイプもあることが示されている（中山・中谷、2006）。そして、前者の自己愛だけでなく後者の自己愛を測定するにはDSM-Ⅲ（APA, 1980）における自己愛性人格障害の記述から作成された自己愛人格目録（Narcissistic Personality Inventory；NPI Raskin&Hall, 1979）を元にした尺度では不十分であるという指摘がなされている。また、原田（2008）は、近年の海外での自己愛的自己概念に関する研究を概観し、自己愛者の自己知識における自己評価の確信度や肯定的自己評価は防衛的反応である可能性が高いと述べている。この点については、自己評価をMPで測定することで、自己高揚感などのバイアスの影響を小さくすることが可能と考えられる。

そこで、本研究では、自己愛の定義を「自己顕示性と過敏性によって、自尊感情を維持

しようとする心の働き」とした。そして、自己愛の２つの型を考慮し、自尊感情および自己愛の２つの型が、どのように自己評価に影響しているかについて検討を行った。

方法

実験対象者および実験施行期間

大学生41名（男性13名、女性29名；平均年齢20.00、標準偏差1.42）を対象に2009年７月～８月および11月～12月に行った。

手続き

手続きについては、まず、集団で質問紙による自尊感情および自己愛の測定を行い、その内、実験参加について承諾が得られた者に個別でMPを用いた実験を行った。

MPは防音の実験室にて試行され、共通テーマとして「自分の能力」、「自分の人間関係」、「自分の将来」を設定し、練習テーマとして社会問題や有名人などからなる３つのテーマを設けた。なお、呈示順序は、練習テーマ３つがランダマイズされて呈示されるようにした。そして、練習試行テーマ３つの後に、共通テーマが「自分の能力」、「自分の人間関係」、「自分の将来」の順番で呈示された。MPの手続きでは、まず、画面にテーマが表示され、それぞれについて30秒間、実験参加者にテーマについて自由に話す事を求めた。この時に実験参加者の発話が録音された。次に、中央に小さな赤い円（丸印）が描かれたコンピュータ画面を眺めながら、録音された発話を、ヘッドセットを通じて聞きながら、自分がターゲット（テーマ）についてポジティブに感じた時にはマウス・カーソルを画面中心の丸印に近づけ、ネガティブに感じた時には丸印から遠ざけるように教示を行った。同様の手続きを全６テーマについて実験参加者に行うよう指示した。

質問紙構成

自尊感情を測定するためローゼンバーグ（1965）が作成した尺度の翻訳版である山本・松井・山成（1982）の自尊感情尺度全項目を使用し５件法（「１．あてはまらない」から「５．あてはまる」）で尋ねた。

顕示型自己愛を測定する尺度としてRaskin &Hall（1979）がDSM-Ⅲ（APA，1980）における自己愛性人格障害の記述を元に作成された自己愛人格目録（Narcissistic Personality Inventory；NPI）の短縮版である小塩（1998）が作成したNPI-S全30項目を使用し、「１．まったくあてはまらない」から「５．とてもよくあてはまる」までの５件法で回答させた。また、自己愛の２側面を考慮して、過敏型自己愛を測定するためにGabbard（1989）の記述を元に高橋（1998）が作成したナルシシズム尺度のうち、傷つきやすいナルシシズム因子14項目を使用し、「１．とてもよく当てはまる」から「６．まったく当てはまらない」の６件法で尋ねた。

実験素材

パーソナルコンピュータ（FUJITSU FMV-6000CL2s）および15インチ液晶モニタ（SONY　SDM-S51、画面解像度1024×768）、ヘッドセットを使用した。

MPのプログラムは森尾・山口（2007）のソースに基づき、森尾が本研究用に練習テーマを変更し、自己に関わる３つのテーマの前に施行される練習テーマ３つがランダマイズされて呈示されるよう改変したプログラムを使用した。

データの整理

MP指標となる軌跡データを森尾・山口（2007）を踏襲して計算した。それぞれのテー

マについて、30秒間のマウス・カーソルの位置が100ミリ秒ごとに、XY 座標値として数値化された。その座標値から中心からの距離を各時点で計算し、その中心からの距離の平均を距離（DIS）とした。そして、100ミリ秒ごとに記録された XY 座標値に隣接する座標間の移動距離を各時点で計算し、平均したものを速度（SPD）とした。分析においては、開始直後はマウス・カーソルの動き（評価プロセス）にノイズが混じる可能性を考慮し、開始から 5 秒間のデータを除外した。

また、自尊感情、顕示型および過敏型自己愛の高低については、度数分布を参考に半数ずつになるよう群分けを行った。なお、分析には SPSS14.0J（for Windows）を用いた。

結果

自尊感情および自己愛を独立変数、MP 指標を従属変数として 3 要因の分散分析を行った。その結果、DIS において自尊感情、顕示型自己愛および過敏型自己愛の主効果が認められた。なお、二次および一次の交互作用は認められなかった。

自尊感情および顕示型自己愛では、低群のほうが高群よりも DIS が高く、また、過敏型自己愛では高群のほうが低群よりも DIS が高かった（Fig 1 ～ 3 参照）。

また、SPD においては、それぞれの主効果については認められず、顕示型自己愛と過敏型自己愛の交互作用が認められる傾向にあった。

そして、Fig. 4のように過敏型自己愛低群では顕示型自己愛低群よりも高群の方が、SPD が低かった。

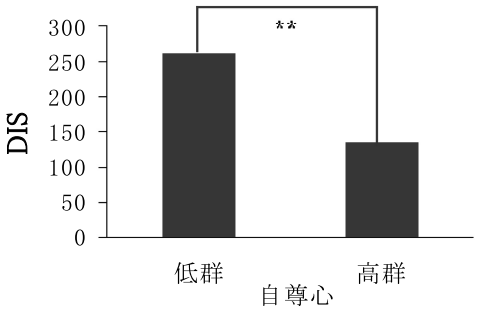


Fig. 1　自尊心群ごとの DIS

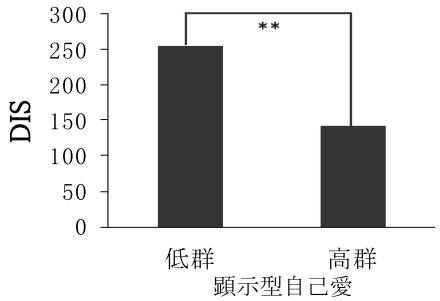
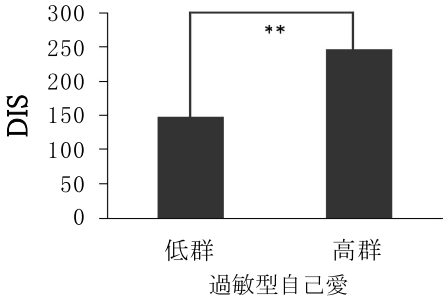
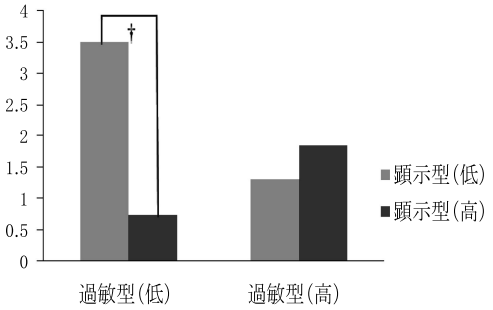


Fig. 2　顕示型自己愛群ごとの DIS



**=p<.01

Fig. 3　過敏型自己愛群ごとの DIS



† =p<.10

Fig. 4　過敏型自己愛群ごとの SPD

考察

自尊感情および顕示型自己愛では低群のほうが高群よりもDISが高く、過敏型自己愛では高群のほうが低群よりもDISが高かった。

DISが低い、つまり中心からの距離が近いことは、よりポジティブに自分自身を評価しているということであり、高い自尊感情および顕示型自己愛が高ければMPにおけるDISで示されるような自己評価の程度が高くなるのは妥当な結果であると言える。一方で、過敏型自己愛では、過敏型自己愛が高い場合にDISが低い場合よりも距離が遠かった。このことは、過敏型自己愛が他者評価への敏感さや、内気さ、対人恐怖的心性を特徴とすることから自己評価がよりネガティブであり、そのことによってMPのDISに影響したと考えられる。これらのことから、質問紙による自己評価の高低はMP指標における自己評価の高低に影響していたことを示している。これらは予測と違わない結果であり、自己評価の高低はMP指標のDISによって測定し得ることを示している。

SPDについては、自尊感情の主効果は認められず、顕示型自己愛と過敏型自己愛の交互作用の傾向が認められた。このことは、自己愛の組み合わせによる差異をMPでの変動性（SPD）で捉えられることを示唆している。

そして、自己愛の2つの型の高低の組み合わせによって自己評価の変動性（SPD）が異なり、過敏的でなく顕示的である場合、過敏的でなく顕示的でないよりも自己評価の変動性は高かった。過敏型自己愛は他者評価への敏感さなどで特徴づけられる。そのような過敏性が低い場合には自己評価に迷いや揺らぎが無いために、自己評価は安定するのではないか。また、過敏型でない場合、自己顕示型かそうでないかによっても異なり、誇大的に高い自己評価を維持する顕示的自己愛が高い方がより安定を見せていた。これは、顕示型の自己評価維持機能が働く事で自己評価が安定すると考えられるためである。

今後の課題としては、MPの発話テーマによって自尊感情および自己愛が自己評価の安定性に及ぼす影響が異なる可能性があるため、更なる検討が必要であるだろう。

付記

本論文は2010年度北星学園大学大学院社会福祉学科臨床心理専攻において修士論文として作成した際のデータを再分析したものであり、北海道心理学会・東北心理学会第11回合同大会で発表された内容である。

本論文について、本学社会福祉学部教授、今川民雄先生の御指導を受けました。また、マウス・パラダイムのプログラムについては関西大学総合情報学部教授、森尾博昭先生より多くの指導を頂きました。謹んで感謝の気持ちを申し上げます。

引用文献

American Psychiatric Association 1980 Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders Third Edition： DSM-Ⅲ. Washington, D. C. ： Author.

Kernis, M. H., Grannemann, B. D., & Barclay, L. C. 1992 Stability of self-esteem： Assessment, correlates, and excuse making. *Journal of Personality*, **60** p621-p644

森尾博昭　2005　パーソナリティ研究への力学的アプローチ　モデル構築と測定　日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集　**14**　p15-p16

森尾博昭・山口勧　2007　自尊心の効果に対する調節変数としての自己概念の力動性　-ナルシシズムとの関連から　実験社会心理学研究　46（2）　p120-p132

中山留美子・中谷素之　2006　青年期における自己愛の構造と発達的変化の検討　教育心理学研究　54　p188-p198

小塩真司　1998　自己愛傾向に関する一研究

－性役割との関連－　名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）　**45**　p45-p53

小塩真司　2004　自己愛の青年心理学　ナカニシヤ出版

Raskin, R. & Hall, C. S. 1979 A narcissistic personality. Psychological Reports 45 p590

Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.